

埋立地の位置

本埋立地は東京灣西岸に流入する多摩川と、鶴見川との兩河口の間に介在する一帶の砂濱にして東京市を距る拾四哩、横濱港に至る貳哩半、海上十三哩を距て、房總半島と相對峙し、附近海面は當時波浪穏穩にして潮流亦緩に航行頗る容易なり。

埋立地の地勢

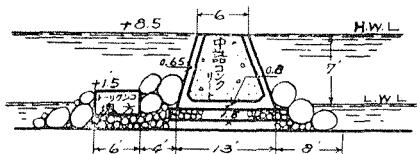
東京灣は灣割線を觀音崎と富津洲として奥行參拾五哩貳分、平均幅員拾四哩、南西より北東に延びたる入海にして、觀音崎と富津洲とは少しく斜に四哩七分を距て、灣口を扼す、又多摩川押出しと木更津押出しとは灣の中央に於て東西兩岸より突出相對し、其距離九哩四分なり。而して最大幅は東京岬ヶ崎間に於て拾八哩八分なり。本埋立地に於ける海岸線の方向は東北東に延び、北西は多摩川流域の平地に連り、南東は海に面し、附近海面は一帶に達淺平坦なる砂濱にして、干潮面以上に干出する部分は、舊海岸線より壹千間の遠きに及び、干満の差は最大潮に於て八尺五寸、小潮に於て約六尺を示す。

本埋立附近に於ける波浪は主として、南東乃至南西の強風に因りて起り、冬期北東風の襲ふ事ありと雖も大なる波浪を生ずる事少なし。

海底の土質は少量の泥土を混ぜる細砂にして、一面海藻の繁茂せるを見る。是れ海底土砂の移動せざる證據にして、從つて波浪及潮流の海底土砂を動かすに足らざるを知る。

計畫概要

總面積壹百五十四萬坪を埋立て、其前面に幅員三百二十六間有効幅員貳百五十間、水深最大干潮面以下三十尺の錨地を設けて、壹萬噸級船舶の碇



(7) 防波堤横断面図
(7) Cross Section of Breakwater.



(6) 防波堤—文字形延長二二六〇間、場所打コンクリート及鐵筋コンクリートケーラン式

(6) Retaining Breakwall, 13,560' long.

舶繫留に支障なからしめ、又埋立地は運河を以て縦横に區分し、解船通航に便し、錨地に碇泊する船舶と埋立地を完全に連絡せしむ。

錨地に於ける繫船設備、航路標識等必要な諸設備を完備せしむるは勿論、更に隧道及び道路を敷設して背後との連絡を計り、尙動力及用水を供給し、以て理想的工業地を建設する目的なり。

埋立工事用主要機械としては電氣サンドボンプ一千馬力一隻(末廣丸)の外に七百五十馬力のもの二隻、百五十馬力のもの二隻を使用す。

防 波 堤

防波堤は埋立地前面より三百二十六間を隔て、地先に平行直線形として全長二千二百六十間に達せしめ、以て南西より来る波浪を防止す其構造は大正六年十月一日東京灣を襲來せし大海嘯(慘害安政三年の大れに比し更に激甚なりしこ稱せらる)の波力一平方呎に付六百封度を基準とし設計せるものにして、其形狀は海底の深淺の度に應じ左の各種とす。